

研究経過報告（昭和61から昭和62年にかけて）

原 岡 一 馬

昭和61年4月1日より佐賀大学教育学部より転任したばかりで、この1年間、名古屋大学教育学部はもちろん、教育心理学教室の社会的規範に適應するのに大わらわであった。何から何まで新しいこと、知らないことばかりで、予想していた研究室での在り方と事実とはかなりの違いを感じた。したがって、研究については、適應した後のことだと考えざるをえなかった。

しかし、それでも、何らかの研究成果を出すことは必要だと考えた。そこで、前から積み残してきたものをまとめることから始めることにした。

この間に、単行本としては、『心理学概論』P.220、をナカニシヤ出版から、また、『心理学 一人間行動の探究』P.213を福村出版から刊行することができた。分担執筆としては、「学級集団」として高橋たまき編『教育心理学のエッセンス』八千代出版の第9章(161-180)を担当した。

なお、9月中には、有斐閣より、三隅二不二監修・木下、永田、狩野、濱口らと小生とで共同編集執筆した『現代社会心理学』が出版されることになっている。

教育心理関係雑誌においては、1986年中に、「自己教育力と学習の仕方」という題で日本文化科学社の「教育心理」1986, 38, 巻1号, 20-23に、また、「討議過程に着目した授業を」を、明治図書の「特別活動研究」の1986, No.222, 13-15, に、「議長のリダーシップとは何か」を同じく明治図書の「特別活動研究」のNo.228, 5-10, に執筆した。さらに、「学級の中で好かれる条件・嫌われる要因」という題で、金子書房の「児童心理」1986, 12, 25-30, に執筆した。

1987年になると、明治図書の「特別活動研究」の誌上に、「子ども集団の心理学と特別活動」について1年間連載講座を行うことになった。第1回の4月号には、「集団と特別活動」, 1987, No.234, 118-123を、第2回の5月号には、「小集団と個人」, 1987, No.235, 118-123を、第3回の6月号には、「集団の目標とコミュニケーション(一)」, 1987, No.236, 118-123を、第4回の7月号には、「集団の目標とコミュニケーション(二)」, 1987, No.237, 118-123を、第5回の8月号には、「小集

団討議へのメンバーの参加(一)」, 1987, No.238, 118-123を、第6回の9月号には、「小集団討議へのメンバーの参加(二)」, 1987, No.239, 118-123を執筆した。

学会活動としては、九州大学で行われた日本教育心理学会第28回大会で、「教師期待の認知と成績の帰属および動機づけ」の発表を行った。また、日本心理学会、第50回大会では、シンポジウム「社会心理学の3大理論と今後の課題」について指定討論を行った。

なお、その他、実践研究として、佐賀県青少年育成県民会議の協力を得て、佐賀県全域にわたる青少年指導者の代表623名に対し、青少年指導の問題点や教育に必要なと思われる点を自由記述してもらい、その中から具体的内容と思われるものをすべて抽出してカードに記録した。これを一次資料としてKJ法を用いて構造化し図表化した。

構造化された内容は、最終的に3つの領域にまとまった。すなわち、①大人の生き方や指導の仕方、②大人と子どもの接触と相互理解、③指導者の自己研鑽と相互調整である。その結果が61年4月に『『青少年育成』のキーポイント』として佐賀県青少年県民会議から発行された。

次に、これらの内容を再検討し、質問形式に作り直し、質問紙調査フォームを作成して調査を行い、その結果を基に因子分析によって青少年育成の領域と次元を抽出した。その結果が『『青少年育成』のキーポイント・II』として、62年5月に、同じく佐賀県青少年育成県民会議から発行された。

現在、これをもとに、青少年育成の教育実践効果を測定するための教育実践に入っているところである。

また、佐賀県鹿島市の社会福祉協議会の協力を得て、社会福祉の実態調査を行い、KJ法を用いて問題点の構造を明確にするとともに、これをもとに調査質問項目をつくり、全市民を母集団として無作為抽出を行い、市としての問題点を把握し、これに対処するための実態調査にとりかかりつつあるところである。

(昭和62年8月29日)